HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	定時制高校生徒の生活と体育
Author(s)	片山, 普次
Citation	北海道大學教育學部紀要, 3, 102-105
Issue Date	1955-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/28980
Type	departmental bulletin paper
File Information	3_P102-105.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

全日制との比較においては，正答率は低く，誤答率，無答率は高くなつている。（20表）都市のS校においても同様の傾向を示している。誤答率が教えられたことを誤つて習得していることを示し，無答率が未学習の結果を意味するとするならばこうした傾向は大いに注目されなければならない問題であろう。

四 結 語

以上，生徒はどのような生活状況のもとで学習しているか，その学習の実態や学力はどのようになつているかについてみてきたのであるが，生徒たちにとつて働らくことと，学ぶことの両立が如何に困難なものであるか，勉学を継続するためには何よりも健康保持ということが重要であるかを示している。従つて，運動と休養，給食と栄養，照明等の関連的な研究とその健康管理と指導が重要なものとして提起されるであろう。

全日制に比べて，誤答率や無答率が高く，教えられたことが誤つて習得していることや未学習の結果と思われる傾向がみられる。更にこうした傾向は，将来もなお，生徒の学習の実態から予想されるところであり，学習指導について考慮する必要があろう。又学習を効果あらしめるためには，生活過程や労働過程によつて得られた経験と知識を活かし，それを深めるような教科編成も考慮する必要もあろう。

定時制高校生徒の生活と体育

片山 善次

序 言

戦後民主教育が叫ばれ学校教育が重要視されて来た。定時制課程において学ぶ学徒も年々増加を辿つているが，彼等はその生活が家庭的，経済的に不偶で努力型の苦学力行の者が多い。このような者はしばしばその生活環境と不調和になることがある。彼等の身心を共に健全に発達させるためにはよき環境と共に充分なる教育がなされなければならない。そこで彼等と最も密接な関係を持つ問題と身心の発達に貢献する体育について調査をして見た。

I 年 代 層

勤労学徒というと我々は何か彼等の年令がずつと多い特異なものという感を抱くが，実際は彼等の年代層は範囲は広いが，全日制と同様の年代（15才～20才位）の未だ発育途上にある身心共に未完成なる若き世代が大半（80％）を占めることに気がついた。個々の人間が正常な発達を遂げるには学校を除いて他に有利な機関は余り見当らない。よりよい生活に対する経験を積むために正しく組織立てられ，管理された体育は全教育計画の他の如何なる面と比べても遙かに大きな可能性

を備えていると思われる。定時制の者には特に健全なる発達，幸福なる共同生活の方法を図つてやらねばならない。調査結果は次のようになつた。

年令	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	30以上
人数	18	69	81	61	53	28	12	20	10	7	6	2	2	1	0	4	2
%	4.8	18.4	21.5	16.2	14.1	7.4	3.4	5.3	2.7	1.8	1.6	0.5	0.5	0.3	0	1.0	0.5

（札西定時　昭和29年10月調　376名）

Ⅱ 家　庭　環　境

我々の身心の発育に影響を及ぼす家庭環境について彼等の場合はどのようであるかを調査した。

両親の有無

（札西定時 29. 10 375名）

両親健在——237名 —63%

父のみ健在——27名
母のみ〃〃——94名　37%
両親無し——17名

住　居（372名）

自宅——265名
親戚——23名
下宿——21名
雇主宅——25名
寮——16名
自炊——22名

学資支給者（351名）

全額本人——222名
全額保護者——108名
一部保護者——20〃
全額非保護者——3名
一部非保護者——2名
その他——6名

上述の結果を見るとその37%が両親の揃わぬ不幸な者がいることが判つた。父親の欠けることはその家族全員の生活の唯一の支点たる経済的条件の低下を意味し，母親のいないことは精神的な不足を感ずることになるであろう。

又学資支給者であるが全額本人負担という者が約6割強を占めることは，彼等の向学心に感心する一方彼等の家庭の経済的貧困をも意味するものであることを知ることが出来る。

Ⅲ 職　　業

先ず始めに就職状態を職種に分けて挙げて見よう。　（札西定時　昭和29年10月 38名）

職種		事務系	販売系	軽労働	重労働	技術的
人数	男	120	45	38	16	53
	女	42	22	6	0	8

男子では約90%，女子では84.7%の者が昼間一定の職業に従事していることが解る。女子は事務系と販売系の業務にたずさわる者がその大半を占めるが，男子においては技術的又は重労働に従事する者が多く見られるようになる。これは現在の社会における性別の職業地位の顕われと思われる。我々の身心は環境に影響を受けることは既に知られていることであるが，人為的環境の中でも職業ほど，普辺的かつ深刻な影響を及ぼすものはない。よく職業体型なるものが論ぜられているので定時制課程の者を筋肉労働，頭脳労働者に分けてその比較の結果を見た。

		筋肉労働	頭脳労働	年令平均	（札西定時　男 29. 10. 118）
16才（31名）	身長	161.8cm	161.3	161.6	
	体重	51.9kg	52.2	52.1	
17才（48名）	身長	164.1	162.6	163.4	
	体重	54.7	53.9	54.3	
18才（39名）	身長	165.5	163.9	164.7	
	体重	55.7	54.8	54.8	

統計数が少く判然とした裏附けをすることは困難であるが，この数字は筋的作業の多い者が体格において，ほとんど大筋活動を必要としない業務に従事する者より優つていることを現わしている。体育運動の必要性はかかる所に根ざしているものと考えられる。

Ⅳ 疲　　労

昼間の労働によつて疲労した身体に鞭打つて夜間勉学に取り組むことは非常なる労苦であり，その疲労の度合も大きなものであると思われるので，彼等が一日の生活で受けた疲労の度合とそれに関連する睡眠時間を調べて見た。疲労度の基準は5（大変疲れる）4，3，2，1（疲労せず）とした。

疲労度	5	4	3	2	1
人数	41	122	172	13	3

（札西定時29.10.351）

睡眠時間	5時間以下	5.01～6.00	6.01～7.00	7.01～8.00	8.01以上
人数	3	44	131	149	43

（札西定時29．10　370名）

彼等が一日の生活を終えて帰宅した時の疲労度は上述の通りである。ほとんど大半がその二本建の生活環境の身心に与える疲労が彼等の強靱な向学の意志のみでは跳ね返すことが出来ないことを物語つている。

Ⅴ 体　　格

今迄述べて来たような不偶な状態に生活している彼等の体格を同じ学校に通学する全日制の者と比較して次のような結果を得た。

年令		15 男子	15 女子	16 男子	16 女子	17 男子	17 女子	
身長	全日	160.5	153.2	163.7	153.9	164.8	154.6	（札西定時29.10 男 95 女 78）
	定時	157.4	152.1	161.6	152.2	163.8	151.4	
体重	全日	50.6	48.1	53.4	49.2	54.7	49.6	（札西全日29．4 男 95 女 78）
	定時	48.0	47.1	52.1	48.9	54.3	50.0	

上述のように同じ学校に通学する生徒でも全日制と定時制においてはその身体の形態上での差異が認められる。定時制の生徒の体格が全日制のそれより低下を来していることは，勤労学徒の置かれている生活の悪環境と職業的活動の彼等の身体に及ぼす影響のいかに甚大であるかを物語るものであろうと考える。更に又長じてその職業的活動の身体に及ぼす偏倚と精神的障害を考える時我々は体育運動はその性格上，このような身体に及ぼす悪影響から人間を守り，順正なる発達を図るに最も適切な手段であると思う。即ち筋的労作を必要としない業務の者には何よりも先ず質的にも量的にも発育刺戟として充分なる一般的運動が必要である。筋的労作を伴う仕事の者には，むしろ運動を軽減し特にその労働からくるであろう身体的偏倚からこれを守るような刺戟を与えねばならない。体育は個々人の生活に適応した具体的，個性的なものであつてこそ始めてその目的に適つた真の姿を表わすのである。

Ⅵ 体育に対する生徒の期待

具体的，個性的な体育を行うには被教育者が体育に対して如何なることを期待しているかを知ら

ねばならない。調査の結果は次のようになつた。

保健体育の時間に何を期待するか？

1. 保健に関する知識	45（8）
1. 身体の均整なる発達（個僂の防止矯正）	41（35）
1. 各種スポーツ技能と規則	69（4）
1. レクリエーションとしての運動	143（64）
1. 体育原理	22（3）

カツコ内は網走南ゲ岡定時制 114 名の調査数

裸数は（帯広柏葉，旭川北，函館西各定時制）486 名の調査数

保健体育の時間の好き，嫌い

好き 419（96）		嫌い 67（18）	
好きな理由		**嫌いな理由**	
健康増進	67	疲労が加わる	16
気持が良い	82	身体が弱い	3
楽しい	91	運神がにぶい	7
疲労恢復	11	好きな運動出来ぬ	9
家庭職場にてスポーツの機会なし	83	保健のみ込めず	7
種々のスポーツを覚える	48	単調だ	1
体育運動が好き	28	運動が嫌い	9
保健のみ好き	14	興味なし	3
その他	14	その他	6

仕事上の疲労と体育について

1. 疲労感より身心爽快を感ず	99
1. 翌日疲労を感じない	93
1. レクリエーシエン的活動を	143
1. 疲労の度合で参加，不参加の自由を	116

指導内容に何を望むか？（網走南ゲ岡のみ）

1. 基礎技術を充分に	29
1. レクリエーション的なものを	80
1. その他	4

上述の結果として彼等は彼等の生活している環境の及ぼす影響として体育の時間にレクリエーション的形態の活動を欲していることを考察した。又疲労の度合によつて体育の量或は体育の内容を考えて与えなければならないと考える。

Ⅶ 結　び

定時制課程に通学する者は今迄述べたように全日制の生徒より非常に不利な環境に生活している者が多い。その中にあつて学業を全うするには非常な努力が必要であると共に健全なる身体でなければならない。体育はその性格上身体的偏倚から彼等を守り疲労恢復或いはよりよい社会秩序に必要な習慣態度の発達に大いにプラスするものである。定時制高校の体育は，彼等の生活環境を考慮し，身体の発達保持に適応したレクリエーション的な，かつ身体の矯正管理を考慮し，そして正しく組織立てられ計画されたものでなければならないと考えるのである。

Data on Educational Problems in Hish Schools

1. Labour and Learning of the Part-time High School Students.

—With a Part-time High School in a Coal-mining Area as the Core—

By Shigeru Ishi.

The aim of this study is to make clear the daily life, especially the relation between labour and learning, of the part-time high school students and to submit the data to reconsider them concerning the part-time high school education.

For this purpose the investigation was carried out with the following subjects in view.

1. How do the part-time high school students harmonize their labour and learning?
2. What diffrence do they have in the achievement as compared with that of the all-time high school students from the difference of the living-condition?

As a result of their surveys we found:

1. Working is inconsistent with learning, in their daily life.
2. They badly need keeping health to continue their learning.
3. Their achievement is inferior to that of the all-time high school students.

For these reasons, if we want to make their learning effectual, we must consider directed-learning for them and make the curriculum on which they can deepen their acquired experience and knowledge.

2. Physical Education and Environment at Part-time High School.

By Sinji Katayama

Part-time high school students, generally speaking, are scarecely favoured with their circumstances of living.

I think, physical education must be able to contribute to those people who are to live on as talented and promising people in the society in the future.

From this point of view, I investigated the most profound problems which have an intimate connection with them.

I believe that these investigations and observations could contribute to the physical education of part-time course as it should be.